

来るべき

精神分析は、近代の「人間」の病の治療法であり、その構想は一九世紀末の最先端の学から構成されている。そして一世紀経った現在も、われわれ分析家はフロイトの概念装置の大半を継承しているが、それらの耐用期限はもはやとっくに過ぎてしまっ

精神分析の

いる。精神分析は二〇世紀に頂点を極め、その可能性を消尽してしまった学なのだろうか？ 精神分析が二一世紀において、なおも発展可能性を持った治療法であり続けるためには、フロイトの思考に潜む普遍への通路を正確に見据えておくことが必要

プログラム

だろう。そして、この普遍への通路を、日々の臨床の具体的な局面の中で、切り拓いていくのである。このような行為の継続のなかにこそ、来るべき精神分析の姿が立ち現われてくるだろう。

十川幸司（精神科医・分析家）

司会：小林康夫（UTCP）

2009年1月14日（水）16:30～18:30

使用言語：日本語 入場無料、事前登録不要

東京大学駒場キャンパス 18号館 4階 コラボレーションルーム 3

主催：東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」（UTCP）